

「領域統治の統合と分裂：東北アフリカ諸国を事例とするマルチエージェント・シミュレーション分析」と題する論文は、破綻国家論を始めとする近年の国家論や紛争論が注目するアフリカについて、国家の領域統治の動態をマルチエージェント・シミュレーション (MAS) 技法を用いて分析したものである。7章の本論と2つの付録 (A4用紙で約290枚の分量) からなる本論文は、政府や反政府政治勢力、分離独立勢力などによる領域統治をめぐる対立を理解するに当たり、地域社会の属性と統治勢力の動員形態との間の局所的な相互作用が国家の領域統治の分裂・統合という大局的な様相を確率的に決めるというモデルを提案し、その妥当性を、スーダン、エチオピア (エリトリアを含む)、ソマリア、ケニアの4つのケースについて検証したものである。

第1章では、国家の破綻や崩壊について、先行研究が現象の説明に終始し、明確な因果的説明をできないであることを指摘する。そして、本論文の目的が、局所的な空間構成に基づいた領域統治の様相という一般的なモデルを構築することにより現象の背景にある論理を析出することをめざすとする。第2章では、地域社会の量的・文化的属性 (人口、民族、宗教、経済水準) と統治勢力の動員形態との間の局所的な相互作用についての MAS モデルを定式化する。ある地域社会をどの勢力が統治するかは、当該地域社会とその近傍の地域社会の様相と既存統治勢力との相性の関数として逐次決定される。モデルがきわめて抽象的なので、地理的分布に関する仮想的な単純な例について、どのような大局的特徴が現れるのかも本章で示される。第3章では、分析対象となる東北アフリカ諸国における領域統治の歴史的概観が叙述され、MAS 結果の評価軸が示されるとともに、対象国をコンピュータ上の仮想国家として構築するための地理情報システム (GIS) に基づいて作成されたデータについて解説される。第4章では、4つの仮想国家についての MAS の結果が、著者が独自に考案した図表化表現によって、比較対照が容易になるように示される。第5章では、MAS 結果と現実の歴史とを比較させながら、モデルの一般的特徴の検証と、個別ケースにとっての妥当性の検討がなされ、モデルの現実との適合性が説得的に示される。第6章では、モデルの妥当性を前提にして、仮想国家を現実の国家に近づけるためのモデル拡張と、拡張されたモデルの MAS 結果と現実との比較が行われる。第7章では、結論の要旨と今後の課題が示される。

以上のような構成と内容の本論文は、MAS技法を国際関係論・比較政治学に初めて本格的に導入した画期的な論文である。第1に、地域社会と政治勢力との局所的な相互作用が領域統治の大局的な様相を生み出す仮想国家モデルは、国家論の定性的理論やMASの既存モデルか

ら大きく飛躍したもので、この種の研究の可能性を切りひらくものである。特に強調すべき点として、既存の内戦・国家破綻研究が国家の集合的属性を表す指標（たとえば総人口に占めるマイノリティ集団の比率や天然資源の総保有量）に着目してきたのに対して、本論文は、住民や資源の空間配置が競合する統治勢力間の領域争奪戦の帰趨を左右することを示した。第2に、MASが抽象的な結論しか出せないという従来からの批判に正面から立ち向かって、GISを駆使して既存の調査結果をデータ化し、仮想国家を現実の国家に近づけることに成功し、MASの結果を現実に対照させて評価できるようにしたことも高く評価できる。第3に、MAS結果がアフリカ国家論の再検討につながっている（第5章の議論）点は、モデルの妥当性、実証分析との適合性という観点から、MASが実証研究にも資することを例証したものであり、単に方法論的な評価を超えて高く評価できる。第4に、様々な条件で多数回繰り返されるMAS結果を示すに際し、本論文では筆者が独自に考案した図表化方法により、大局的な領域統治の様相が一目瞭然となったことも、技術的な点ではあるが高く評価できる。

もともと、このように高く評価できる本論文ではあるが、不十分な点がないわけではない。第1に、破綻国家論などについて一般的な説明論理が欠如していると批判しながら、本論文の結論は、局所的相互作用が大局的様相を導出するという主張はきわめて斬新な理論提起ではあるものの、既存理論を否定しそれらに置き換わるものではないという意味で、自身の批判に十分応えていない。第2に、モデルの拡張について、いくつかの興味深い方向性は示されているものの、必ずしも体系的ではない。第3に、空間の拘束性を強調しているが、モデルの特徴は近傍の属性を踏まえた局所的決定であり、空間のあり方（たとえば領域の形）が結果を左右するかどうかについての理論的検討が伴っていない。

以上のような本論文の短所は、MASと実証的研究とを架橋し、領域統治に関する局所的相互作用モデルにより大局的様相を再現できることを示したという画期的な成果をいささかも損なうものではない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。